壽庚に關する最後の記事、蒲壽庚と定武蘭亭、心泉學詩稿、蒲壽崴の官歴、退隱後の蒲壽崴、福建行省の廢置、支那人の排行、南蕃回々佛蓮、バアラインと支那との關係、外商の遺産處分、明太祖の異種族排斥、明初蒲姓の禁止、支那歴代の禁錮、色目の名稱の解釋、元代色目人の勢力等、二十一項を擧ぐ、之を要するに著者も謂はるる如く、本論著に於ては波斯僧及烈の佚事、高麗の蔡氏の佚事、キンツアイ行在說、タウガス唐家子說、カンツウ江都說、ジャンフウ泉州說、カンフウ陷落年代、唐宋時代に於ける外人犯罪者の處分、宋時代に於ける支那船の構造設備、支那銅錢の海外流出、懷聖寺懷聖塔の沿建年代、元史の來々國丁、呵兒國、急蘭亦帶國の位置、廣州の蒲姓の風習等につき是非を論じて博士の創見を公にしたるものにして、東洋史西洋史に志す者は必ず一本を備ふべき必要ありとす、菊版三百十頁の美本、卷末に索引、卷首に唐宋之時代東西兩洋海上交通參攷圖を添ふ。

（支那上海鞄子路第百拾貳號東亞攻究會發行、丸善株式會社本支店發賣）（那波）

彙報

●京都帝國大學文學部史學科本學年講義題目

	毎週	
國史概說（中世）	二	三浦教授
武家時代の經濟史觀	二	
諸藩の比較研究	二	喜田教授
古代史特殊事項	二	
古代史籍解題	二	
國史地理	一	
史學研究法	二	西田助教授
國史概說（古代、近世）	三	
京都の史的研究	一	
古文書學各說	二	中村（直）講師
東洋史概說（漢唐時代）	二	桑原教授
唐律の研究	二	
日知錄	一	
東洋史概說（上古時代）	二	内藤教授
滿洲開國時代の研究	二	

東洋史概說（清朝時代）
英支外交關係
支那關係外交條約文研究
東洋史概說（宋元時代）
中央亞細亞出土文獻解說
西洋史概說（古代東方・古典古代・中古）
獨逸史學史（ヘルデルよりランケ迄）
古代中古及近世に於ける特殊事項
史籍講讀
西洋史概說（近世及最近世）
伊太利復興期の文化
考古學概說
日本考古學
羅馬考古學
地理學概說（人文）
聚落地理
地理學講讀
地理學實習
演習

二　矢野教授
二
一
一　羽田教授
二
二　坂口教授
一
二
二　中村（善）講師
二　大類講師
一　濱田教授
一
一
二　石橋教授
一
二
二

地理學概說（自然）
日本群島
地理學實習
地質學
地圖學
人類學

二　小川教授
二
一
三
二　横山助教授
二　足立教授

◉大正十三年度卒業論文題目

京都帝國大學文學部に於ける本年度の史學科其他の卒業論文の題目の中史學地理學に關するものは次の通である。

史學科

江戸幕府の宗教政策（國史）　勝峯月溪
德川幕府の租稅（同）　加藤鐵三郎

哲學科

六朝時代に於ける釋老の交涉（支那哲）　名畑應順

文學科

默阿彌の世話物に就いて（國文）　吉見廣勝
近松劇内的概觀（同）　木枝增一
平家物語の成立に關する研究（同）　△後藤丹治

（△選科生、○委託學生）

●京都帝國大學第十五回夏期講演會

毎年恒例として開かるゝ本學の特別夏明講演會は本年もまた八月一日から九日までの間に開かれる。講演題目の内史學に關するものでは

日本文化史　文學部　西田助教授

があり、科外講演では

ワーズワスの人生觀　文學部　石田　講師

萬葉女歌人について　同　澤瀉助教授

がある。聽講希望者は大學本部に照合すべしと。

●帝國學士院授賞式

帝國學士院本年度授賞式は五月八日擧行されたが受賞者の中で史學に關係あるものは左記の通りである。

恩賜賞授與

一長慶天皇御卽位の研究　故文學博士　八代　國治

桂公爵記念賞授與

一大日本金石史　木崎　愛吉

大阪毎日東京日日新聞御成婚記念賞授與

一和鏡聚英　廣瀨治兵衛

●西田直二郎氏學位授與

本會評議員たる西田直二郎氏は「王朝の庶民階級」と題する論文を京都帝國大學に提出して去五月十二日附で文學博士の學位を授與された。

●新井白石二百年忌記念講演會

史學地理學同攷會主催の新井白石二百年忌記念講演會は去四月十六日午後六時半より大阪市大江ビルデング講堂にて開催、左記の講演があつた。

一新井白石と其時代　文學士　魚澄惣五郎

一新井白石の重商主義　文學士　西田直二郎

一異域研究者としての新井白石　文學博士新村　出

次で五月三日午後二時より京都帝國大學學生集合場に開き、左の講演があつた。

一新井白石に就いて　粟野　秀穗

一新井白石の史學思想　文學士　西田直二郎

一新井白石の一遺聞について　文學博士　內藤虎次郎

猶ほ白石に對する研究を發表せらるゝ筈の三浦博士は最

近令孃の不幸に依りて欠席せられた。因に當日は白石に關する史料を肖像及墓銘、書翰、自筆本、著述、白石關係圖書の五類に分ちて陳列したが、就中近衞文麿氏所藏五月十一日附書狀、同六月廿八日附書狀、同十二月十三日附書狀、久原文庫所藏正德三年閏五月十四日附書狀、雨森民雄氏所藏元弘劍璽記の書狀、久原文庫所藏白石自筆高子觀遊記、同上論語筆記、京都帝國大學附屬圖書館所藏太田南畝の識語ある蝦夷志、同國史研究室所藏小宮山楓軒の識語及び書入ある讀史餘論等の稀覯のものがあつた。

◎史學研究會

例會　五月十日午後一時半より法學部第三教室に於て開催左の講演あり來會者五十餘名午後五時散會す。

尋尊僧正と時勢　　牧野信之助君

右は其一部を本號に掲載せしものなれば、要領を記す事を略す。

バロック時代とルーベンス　文學博士　大類　仲君

十六世紀の後半より十八世紀の頃迄のバロック時代の特色は全歐に歷史の生命の横溢せることにしてルーベンスは此の時代背景を負ひ人の感情に訴ふる色彩美麗なる畫を製し血と肉の氣味充分なる作品を爲しMascecio等の畫に現はれざりし新傾向を開きしが、これ實に時代文化の影響せしものならん。

◎支那學會

例會　四月二十七日松崎慊堂、猪飼敬所兩先儒を中心とし日本に於ける漢學派の功績を表彰する意味の講演會を京都帝國大學々生集會場に公開し

猪飼敬所先生の事蹟及び學問　文學士　神田喜一郎君

松崎慊堂先生事略　文學博士　狩野　直喜君

日本の漢學派　文學博士　内藤虎次郎君

の講演あり同時に會場に於て右講堂に關係ある松崎慊堂猪飼敬所、山内君秦、近藤正齋、吉田篁墩、狩谷掖齋、市野迷菴、山梨稻川、最上鶯谷、澁江抽齋、小島成齋、海保漁村、岡本況齋諸儒の遺著遺墨一百七十點を陳列し非常の盛會なりき。

例會　五月二十二日午後六時より文學部第五教室にて

開催左の講演あり。

黄河々源に就て　　文學士　藤田　元春君

鬼神論　　文學博士　高瀨武次郎君

送別會　六月九日午後五時半より京都帝國大學學生集會場に於て今般歐米各國へ學事視察の爲出張せらるる文學部教授文學博士内藤虎次郎氏の爲に送別の宴を設け出席者四十五名午後八時散會せり。

◉讀　史　會

例會　三月二十四日午徐六時より、學生集會場にて開催出席者三浦教授以下十八名、本年卒業されし加藤勝峰の兩君より其の論文報告として左の講演あり終りて三浦教授の批評ありて散會せり。

一、德川幕府の租稅　　如藤鐵三郎君

先づ租稅史研究の概說として、租稅の意味、德川幕府の租稅研究の價値、方法時代の區分等を述べ、次にその種類を擧げ、田租、小物成、課役、武家役等に賦課及徵收の方法を示し、更に徵稅機關の組織にも及び最後に結論として稅率及び其徵納の社會に影響せる點等を擧げられたり。

一、江戸幕府の宗教政策　　勝峰　月溪君

內容を基督教と佛教及び神道の二つに分ち、前編に於ては、織豐二氏の對基督教策より、家康、秀忠、家光のそれに及び、最後に鎖國の得失を論ぜられたり。後編に於ても織豐二氏の對佛教策に說を起し、幕府の宗政機關並に其の開發政策、及び之が佛教界に及せし影響、幕府の神道に對する政策等を述べ最後に維新に於ける廢佛毀釋の運動にも論旨を進めて完結を期せられたり。

例會　去五月九日午後六時半より學生集會場に於て大正十三年度第一次例會開催、左記講演終了後會員西田助教授より讀史會の沿革に就て新入會員のために說明ありたり。

一、吉田定房　　文學士　中村　直勝君

吉田定房に對する考察の態度を前提し彼に就ての疑團は背景としての彼の生存した時代精神がいかなるものであつたかを觀察することによつて明らかになり、それによつて彼にからまる非人格的の暗影も除かれるであらうと

論述し、彼が、彼と不可離の關係にある大覺寺統を裏切り討幕計畫を幕府に密告し、又花園院の院の評定衆となり、光嚴院の大嘗會にはその女を五節の舞姫として出してゐると云ふ如き旗幟頗る不鮮明なるこの一人格を批判するには當時の公卿が無主義無節操にして勢權把握のために醜き内訌を不斷に起してゐたことを知らねばならぬ吉田家の人としては異常の榮達をしたる定房は自己の地位を安定せしめんために自己を賣り、人を賣たのであるこの不純なる人格が吉野にて冥目したと云ふにとが彼の終末を飾る最後の一頁とせめてもなつたと結ばる。

例會　五月三十日午後六時半より、學生集會場に於て開催、左記講演ありて十時散會。

一、伊勢神宮御鎭座に就て　文學博士　喜田貞吉氏

神道五部書以下神宮關係の諸書に僞書多きことを摘發し神宮關係の記事の眞相を傳へられざるを論難され、五十鈴川と宮川との混同せることを述べ今の五十鈴川は御裳濯川ならんと論據を指示して論述される。續いて内宮、外宮の祭神及御鎭座の場所、御遷宮等のことに關して詳

述し山田にては外宮の祭神は國常立神にして内宮の下に從ふべきにあらずと主張せる結果、宇治、山田の爭となり流血の悲慘事を見るにいたれるが明治以後になりて初めて兩宮の別明かになるにいたつたと論を結ばる。

見學旅行　五月三十一日午後二時一行は京阪電車に乘り六地藏に下車、直ちに法界寺に到る。西田助教授、中村講師より法界寺の沿革、堂舍建築及佛像に就ての說明を聽く、滴る如き深綠を繞せる古刹の雅趣を愛で、薫香の香しみつきたる薄暗き内陣に入りて須彌壇近くに定朝作の金色の上品下生の彌陀尊像を仰ぐとき彌陀如來を慈悲親として隨喜の涙を流すゆかしい念佛信者の心持もうかがはれ稱名が自づと口に出る。高雅なる藝術品は神そのものであることを强く思はせる。

法界寺に殘り多い別れを告げて下醍醐を經て直ちに上醍醐に登る。五時頃宿坊につき名物醍醐湯を浴びて疲れを流し晩餐に精進料理を味ふ、その夜は、深山の梵刹の奥まれる廣間に一行は圍居して左記の如き講話を聽き、終て各自の自由質問に懇切なる應答をして戴き夜の更け

るのを忘れてゐた。閑寂な夜、茶をくみつゝしんみりしたお話に落着いてゐるとき郭公の帛を裂くやうな聲が二聲三聲窓外からきこえ身の引き緊るを覺えた。この夜の忘れ難い茶話會は盡きぬ愛惜を殘して十一時過閉じた。

醍醐寺及法界寺の建築に就て　天沼　教授

郭公に關係する一古文書に就て　中村　講師

醍醐寺の沿革に就て　西田助教授

翌六月一日は午前中上醍醐にて清瀧拜殿、藥師堂、五大堂、御影堂、經藏等の諸建築に就て天沼教授より教示を受く。かくて、見學族行ならでは得られざる知識と印象を得たることを異口同音に喜びつゝ下醍醐に下る。ここにては五重塔の建築を賞讃し、金堂を見學し、三寶院の書院、庭苑、座敷等を參觀して所藏の古文書を檢索する。滿濟准后日記、義演准后日記を初め御宸筆の數々と國寶となれる畫軸の多くを見て四時過ここにて解散して各自歸途につく。

會報

●寄贈交換圖書

國學院雜誌　三〇の三・四・五　國學院大學
史學雜誌　三五の二　史學會
朝鮮史講座　七・八　朝鮮史學會
東洋思想研究　一六　東洋思想研究所
東洋學報　一三の四　東洋協會學術調査部
觀想　四・五　東洋大學
經濟論叢　一八の三・四・五・六　京大經濟學會
龍谷大學論叢　二五四　龍谷大學論叢社
歷史地理　四三の三・四・五・六　日本學術普及會
國學季刊　一の三　國立北京大學
藝術史壇　八七　廣島尙古會
大正十一年度古蹟調査報告　第一冊　朝鮮總督府
朝鮮文廟及陞廡儒賢　小田省吉著
古代國語の研究　安藤正次著

●會員動靜

●入會

京都市上京區烏丸通上立賣上ル　太田喜二郎
京都市外大宮村字林　豐岡圭資
（右紹介者　羽田亨）
東京市下谷區谷中天王寺町三五　硲慈弘
（右沼介者　井川定慶）
京都市上京區吉田町中大路二三　飯沼守麿
（右紹介者　島田貞彦）
東京市芝區三田綱町一　山口昌
東京市麻布區富士見町九　土居保太郎
（右紹介者　飯田忠純）
京都市上京區三條通室町東　木島誠三
（右紹介者　中村直勝）
岡山縣立師範學校　大内千秋
（右紹介者　笠原節二）

退會

山内二郎、鳥野幸次、澁江小麿策、左藤義詮

死亡

安部立郎　八代國治

會費領收

大正十三年度

大橋金造　野山忠幹　甲崎環
臼鳥庫吉　伊藤祐晃　柏木彦一
布川豐　禿氏祐祥　津金史香
松川武一　篠田周之　藤田穩三
大石治吉　松田祐德　山田角人
羽倉信一郎　大久保利謙　植村清二
黑井治德　大西源一　鹿島圓次郎
瀨野馬熊　飯沼守麿　佐々木彌四郎
内田清長　清水博夫　樋口津彌太郎
米田恭禮　堀場義馨　博多久吉
浦上宗衛　岩生成一　室賀萬之助
岩田覺藏　渡邊世祐

大正十二年度

西田宏　高橋萬次郎　伊木壽一
石原昌胤　石川富士雄　松本信廣
淺見倫太郎　渡部求　鳥野幸次
笠原節二　田保橋潔　中村久四郎
平泉澄　藤井甚太郎　東洋文庫
長坂金雄　林五一　白鳥庫吉
李範昇　大金弘道　西筒虎之助
田澤金吾　齊藤斐章　樋口津彌太郎
高雄義堅

大正十一年度

木下貞太郎　衣笠健雄